

A-175 嗜好の生態学的考察 (第2報) (嗜好の変容について)

名古屋栄養短大 ○中塚静江 長野美佐緒 石垣志津子
田口和子 井村美和子

目的 人間の嗜好には有機的、総合的に複雑な因子が入り乱れて客観的な把握がむづかしいが今回は嗜好の行動性についての側面を嗜好の尺度法からとらえ、昨年の同調査と比較し1年間の変容の状態を調べることににより今後の方向づけを見出したいと思ふ。その知見を得たので報告する。

方法 本学2年次生 622名について実施。期日は昭和53年12月10日より1週間内は一斉に行った。調査内容は地域別、父の職業別、母の職業の有無と嗜好との関係について χ^2 検定を試みた。調査食品は日常使用頻度の高い食品50種、料理70種を用いた。嗜好調査法は peeryam の嗜好尺度法を引用した。

結果 (1)地域と食品の嗜好度との関係は有意差が認められなかった。生産者と消費者と食品の嗜好度との関係は牛乳において有意差を示した。母の職業の有無においては海藻類きのこ類に有意差を認めた。(2)昨年好まれなかった食品のうち、ほうれん草、人参が嫌われるグループから姿を消し放育の成果が嗜好の因子に加わることを物語っている。(3)全般に昨年に比較し標準偏差が小さくなり、はげしい好き嫌いが縮められて若い年代の嗜好は容易に習慣食から脱皮できることが確証できた。(4)依然として好まれたい料理に高野豆腐の合め煮、ひりょうすの合め煮、羊肉料理、鶏もつ料理、納豆があるが、嫌われる料理が昨年18項目であつたのが7項目に減少した。今回は2年間の変容から、心理的、放育的分野に対し、1部分ではあるが、その要因を追究することができた。